

地域に伝わる伝説や民話、文化財などを紹介

にしあいづ物語100選 その10

文：岩橋 義平さん

中町の地蔵講 (お地蔵様を当番宅にお迎えし祀る)

その昔、ある村人の夢枕にお地蔵様が現れ「川に沈んでいる私をすくい上げてほしい」と告げられました。驚いた村人が翌朝急いで川に行ってみると、清らかな流れの中に親子と思われる二つの石のお地蔵様がありました。村人はそのお地蔵様をわが家へお連れし、堂宇を建て大切にお祀りしたのです。あるとき、お地蔵様から「私は延命地蔵である」とのお告げがありました。噂はあっという間に広まり、村人はもちろん、周辺からお参りする人も増えていったそうです。

それから数十年後、この地蔵様をお祀りしていた甚三郎という人は、傷んできた堂宇を建て替えようと決め、村の人や近在の人たちに協力を呼び掛けました。そうして堂宇が立派に完成し、二体のお地蔵様が現在の場所に安置されたのでした。

これを機に、村の人たちは“講”を結び、信仰を守り続けることにしました。講は、毎年3月24日と8月24日を縁日としています。古くは5つの組回りでした。当番が身を清めて御堂に行き、お地蔵様を背負い自宅にお連れすると、やがて組の人たちと次の当番の組の人たちが集まります。集まるのは女性だけです。女性たちはご詠歌を歌い、お地蔵様と一緒にごちそうを食べます。そして、ひとときお地蔵様と過ごした後、次の当番に当たる人が再びお地蔵様を背負い、また御堂にお送ります。このとき、「いっぱいごちそうになられたから、なんと重くなられたこと」と言うのが習わしになっています。また、子どものお地蔵様を抱けば子宝に恵まれるとも伝えられ、今も村人によって信仰が守り続けられています。現在は集会所で縁日をお祀りしています。



↑当番の家でお地蔵様をお祀りする様子



↑次の当番がお地蔵様を御堂にお送ります



今月の表紙

今月の表紙は、車麩ラスクのお土産用パッケージです。このパッケージは、ジビュアルは、上野尻在住のグラフィックデザイナー・榎崎萌々恵さんとウイリアム・シャムさんが高校生のアイデアをもとにデザインしました。

編集後記

西高魅力発信隊の活動を追った今回の特集。高校生たちから伝わるワクワク感と町の未来を真剣に考える姿、そして活動を支える皆さんの熱い思いに心を打たれました。こうした活動があるというだけで、高校生たちの地元に対する考え方も変わってくるでしょうし、何かを形にしたという経験は、社会で生き抜く糧になると思います。仲間と協力すること、力を合わせて何かを成し遂げることは、勉強だけでは味わえない大切な経験です。

情報政策係 長谷川祐一